

『図書館/情報ネットワーク論』再読

著者	村上 泰子
雑誌名	インターディパートメント論集
巻	1
ページ	21-25
発行年	2008-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10112/6683

インターディパートメント論集 第1号 抜刷
2008年3月15日 発行

『図書館／情報ネットワーク論』再読

村上 泰子

〈文献紹介〉

『図書館／情報ネットワーク論』再読

村上 泰子

先日文学部のリレーコラムに、じっくり読む一冊を持ちたいという話を書いた。何度も何度も繰り返し読んで、それでもなお新しい発見、新しい示唆を与えてくれる書物。読む側の成長に合わせてその姿を変える書物。時を経てもなお風化しない書物と出会えることは幸せである。

筆者の研究領域は図書館情報学である。この領域の図書のうち、これまでに繰り返し読み続けてきた一冊が原田勝著『図書館／情報ネットワーク論』（勁草書房、1990）である。以下では「本書」と記す。本書の著者は筆者の恩師である。2004年、59歳で早逝した。

1990年といえばインターネットの存在はまだ一般には知られていなかった。オンライン情報検索サービスは1970年代に始まっていたが、図書館界では、コンピュータで読み取ることの可能な目録データを国立国会図書館が磁気テープの形態で頒布しはじめたのが1981年。東京大学文献情報センター（後の学術情報センター、現国立情報学研究所）が目録・所在情報サービスの運用を開始したのが1985年。同センターが情報検索サービスを開始したのが1987年。図書館は、日々高性能化・小型化・低価格化するコンピュータを利用した様々な可能性に目を開き、フレキシブル・ディスクやCD-ROMといった新しいメディアの登場に刺激を受けつつも、まだまだそれらの行方に戸惑いを隠せない状態であった。そのような時期に刊行されたのがこの一冊である。

まえがきにはこうある。

人々のもつ多様な情報要求を満たすために、どのような形の情報ネットワ

ークがつくられているか、あるいは将来考えられるか、そうしたネットワークを介しての情報利用をいっそう便利にするためには、どのような問題があり、それらはどのように解決しうるかといった、著者の日頃の問題関心を中心として、図書館／情報ネットワークをめぐるさまざまな 이슈ーを、広い視野から検討した結果をまとめたものである。

「図書館」と「情報」という語の間を一続きでもなく、中点でもなく、スラッシュで繋いだのには、著者のこだわりがあった。一続きにしてしまうと「図書館情報」という別の意味になってしまう。中点では単に図書館と情報が別々のものとして並列されている印象を与える。ここでイメージされているのは、図書館ネットワークと情報ネットワークとがより緊密に融合した姿であり、図書館だけではない情報提供機関のすべてを含めたネットワークであった。その意味を表すために、あえてスラッシュで繋いだのである。

まえがきを再び読み返して、ある一文に目が止まった。そこには「情報源の増加・多様化がかえって情報の混沌をもたらすとしたら、何のための情報化かということが問われるが、その兆候がないとはいえない。」とある。われわれは今まさに、インターネット上に溢れ、生まれては消えてゆく情報源の混沌たるさまに、しばしば足をとられているのではないか。

全11章で構成されるすべての章において、このような示唆に富むアイデアが提示されていた。

情報ネットワークの構成要件から、図書館とニューメディア（当時はこのような呼び名だった）、図書館の機械化、書誌ユーティリティ、ドキュメント・デリバリー、全文データベース、そして今や欧文雑誌では当たり前となった電子ジャーナルに至るまで、目配りされている範囲は幅広い。それらの中で書誌情報システムの標準化を扱った章を紹介しておきたい。

読者の中には書誌情報といってもピンとこない方もおられるかもしれない。関西大学の図書館であれば、KOALAを検索してヒットする幾つかの候補の中から、さらに詳しいものを1つだけ選んだときに表示されるタイトルや著者な

どの事項の集まり、それが書誌情報である。かつては図書館ごとに手作業で作られていた書誌情報も、機械化・ネットワーク化による共有が図られるようになった。

情報というものは多く集められれば集められるほど、必要なときに必要なものを取り出す仕組みを要するようになる。ひとつには類似のものをカテゴライズすることによって行われ、もうひとつには情報の中身を圧縮するという方法によって行われる。書誌情報はもとの情報を圧縮したものである。複数の書誌作成機関により生産された書誌情報を共有して、なおかつ矛盾のないようにするためには、スタイルの標準化が求められる。その標準規則が目録規則である。

日本では1987年に『日本目録規則』の大改訂版が刊行された。それまでの目録規則にはなかった「書誌階層」という概念が初めて導入されたのがこの版であった。ここでは「書誌階層」には深く立ち入らないが、簡単に言えば、一冊の図書は何らかのシリーズに属する可能性があり、一方では一冊の図書の中に複数の作品が収録されている場合がある、こうした関係性を階層の上下関係に置き換えてとらえようというのが「書誌階層」の考え方である。規則というものは現実に合わせて修正されていくのが通常である。「書誌階層」がこの年に導入された背景には、先に述べた書誌作成の機械化と書誌情報の共有化とがあった。

本書では、目録の対象とする範囲がネットワーク上の電子情報資源にまで拡大されれば目録規則もその影響を受けて変わらざるをえないこと、媒体ごとの規則構成には限界があること、新しい技術の導入によって一層合理的な目録作成のあり方を追求すべきであることなどが指摘されている。そして、ここで予測されていた潮流は、その後15年で現実のものとなっていった。

実際、目録規則にはネットワーク上の電子情報資源という新たな媒体についての規則が含まれた。しかし媒体ごとの規則構成は相変わらずの継ぎ接ぎ状態であった。その結果、これまでの目録規則の構造のままでは、規則同士の相互矛盾が避けられず、また規則が複雑になりすぎることが明らかとなり、目録

の機能自体を根本から見直す作業が行われた。その見直し作業がひとつのまとまった形となって姿を現したのが、国際図書館連盟の作業グループによる提案「書誌レコードの機能要件」である。(次の翻訳が入手できる。和中幹雄, 古川肇, 永田治樹共訳『書誌レコードの機能要件』(日本図書館協会, 2004)) この報告は複数の提案群から成っており, その中核は資料の構造に関する提案である。たとえば一冊の図書というものの成り立ちを考えた場合, まず著者の知的・芸術的アイディアとしての著作というものがああり, それが何らかの表現手段(文字, 写真, 音, 動画など)によって具体的に表現され, 表現されたものが何らかの媒体(紙, テープ, CD など)に具現され, 最終的にはそれが複製されたものが個々の図書館や読者の手に渡る, というように解体される。これは表現手段や媒体によらず共通の骨格である。この考えに基づいて, 従来の個別の規則項目をこの骨格に沿って構成しなおそうという試みや, この構造をOPACの結果表示に反映させようという試みが世界中で進められている。

本書で1990年代以降の将来像を描き出した著者の関心は, その後「電子図書館」へと向けられた。現在の国立国会図書館長である長尾真らとともに取り組まれた電子図書館プロトタイプ *Ariadne* の構築では, システムこそまだスタンドアローンであり, 現在から見れば萌芽的であるとの印象をまぬかれないものではあったが, そのアイディアは当時の図書館関係者や開発者にも多大なインスピレーションを与えるものであった。目録との関係で言えば, 従来の書誌情報にとどまらず, 目次情報を活用した検索手法は画期的なものであったと言えるだろう。プロトタイプ構築過程における様々な検討の結果は『研究情報ネットワーク論』(勁草書房, 1994)で知ることができる。

本書の刊行から15年以上が経過した。その間に図書館や研究を取り巻く環境は激変した。欧文雑誌は電子ジャーナルが当たり前になった。インターネット上に様々な学術情報がアップロードされるようになった。Googleは図書館の蔵書をデジタル化し, コンテンツの利用を促進する試みをスタートさせた。図書館はGoogleに飲み込まれてしまうのか, というような懸念すら聞こえてくる。

ここでも、本書のことに耳を傾けたい。次の一節は、全国的なシステムの登場により、地域的なシステムが不要なものとなるかどうかについて答えたものである。

全国的なパソコンネットワークが多くの草の根ネットワークと共存しているように、より柔軟な、より限られた利用者のための学術情報システムが多数存在することができる。これは、情報の独占とは違う。文化は、伝統の固守や均質化によってではなく、異なる価値とのぶつかり合いによって、より洗練されたものになる。研究も同じところがある。(p. 279)

東京、パリ、京都と異なる文化の地に暮らした著者ならではの、含蓄のある言葉として記憶にとどめたい。

著者はわが国の図書館発展の抑止要因として、図書館員の専門教育の不十分さ、図書館員の地位の低さ、大学教育の方法、利用者の要求水準を挙げている。これらは今なお十分に解決されたとは言い難いものばかりである。書誌情報作成についてだけを見ても、ここ10年ほどの間にネットワーク化の副作用が露わになってきている。総合目録データベースの書誌情報の品質低下が著しいのである。職場でのノウハウの継承はいまやほとんど機能不全に陥っている。伝統的情報資源の組織化でさえこのような状況であって、これまでの図書館の枠を越えたより広い情報資源の組織化にどうして立ち向かえるのであろうか。専門職論議はかまびすしい。我が国においては、専門職というものがごく一部の職業を除いて成り立ちにくいというのも事実であろう。しかし、それを託っていても仕方がない。情報資源の組織化に関していえば、書誌情報（最近の言葉で言うならばメタデータ）の作成のみならず、情報の分析・加工の手法の洗練にも取り組むことが求められる。このことは図書館専門職の養成に携わる自分自身への自戒の言葉としても記しておきたい。